特集

「曖昧さの心理学」特集にあたって

竹村 和久 *

近年、人間の知覚、認知、感情、意思決定などの心的機構の解明に向けて、ソフトコンピューティングを活用し、人間の神経科学的基盤に立脚した心理モデルの研究が盛んに行われている。このような研究の流れの中において、「曖昧さ」に関する心理学研究もあらわれている。特に意思決定の心理学である行動意思決定論においては、曖昧さのもとでの意思決定の研究が数多くなされている。また、伝統的に、心理学では、臨床心理学における投影技法においても曖昧さは活用されており、人間の言語コミュニケーションにおいても曖昧さは重要な役割を果たしている。

曖昧さは、まず、意思決定の心理学においては、不確実性下の意思決定のもとで出現する。ここでいう不確実性下とは、選択肢を採択したことによる結果の確率が既知でない状況をいう。この不確実性下の意思決定において、どのような状態や結果が出現するかはわかっていないが、状態や結果の出現確率がわからない状況を、曖昧性下の意思決定と呼んでいる。集合で表現すると、状態 Θ の要素 θ_i や結果の集合 X の要素 x_j はすべて既知であるが、 Θ 上の確率分布が既知でない状況、あるいは X 上の確率分布が既知でない状況のことになる。例えば、株などの金融商品の意思決定の場合、金利下降 θ_1 の確率 $p(\theta_1)$ 、現状維持 θ_2 の確率 $p(\theta_2)$ 、金利上昇 θ_3 の確率 $p(\theta_3)$ 、いずれもが曖昧にしかわからないような状況である。

このような意味での曖昧性は、知識の不足や「無知」から生じていると考えることができる。また、曖昧さには、境界の曖昧性や集合の曖昧性を指す場合がある。このような意味での曖昧さもファジィ理論の中で扱われてきており、曖昧性下の意思決定の場合も、不確実性や言語確率などをファジィ集合で表現する場合がある。

意思決定の心理学では、曖昧さは、選択肢の構造、環境の構造、属性についての知識などの無知のために

生じると考えることができるが、すべての曖昧さが無知のために生じるとは考えられない。例えば、政治的な駆け引きでわざと曖昧な表現を用いる場合や、社交において、礼儀を重んじる場合にわざと曖昧な表現をとることがある。このような意味で、曖昧さというのは、幅広い意義を持つように思われる。心理学においては、「曖昧さ」については、伝統的に無視できないものと考えられてはきたが、しかし、「曖昧さ」が集中的に取り扱われてきたとは言えない。

本学会は、実社会や人間の諸活動に存在する曖昧さを数量的に処理するファジィ理論を基礎として発足している。曖昧さを扱う科学をより一層進展させるためにも、人間が心的活動においてどのように曖昧さを用いているかということを理解することが必要になってくる。このような背景から、本特集では、曖昧さに関わる心理に関する研究(心理実験や社会調査、データ解析、意思決定、心理学的理論、神経科学的理論、効用理論、測定理論、モデル構築、システム開発、応用事例や適用事例の報告など)について、広く論文を募集した。さらに、現状では、ファジィ理論やソフトコンピューティングに関連していなくとも、今後これらの分野との学際的發展が期待できる研究も含めて論文の募集を行った。その結果、数多くの論文が投稿され、数多くの匿名の審査員の協力による何段階にもわたる厳正な審査の結果、本特集号に収められた論文が残った。また、本特集では、知覚、意思決定、臨床の心理学の各分野における曖昧さの解説論文も掲載されている。本特集によって、「曖昧さ」の心理学に興味を持つ人が増え、研究が発展する契機になれば幸甚である。

[問い合わせ先]

〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1

早稲田大学意思決定研究所

竹村 和久

TEL: 03-5286-3549

FAX: 03-3203-7718

E-mail: kazupsy@waseda.jp

* Kazuhisa TAKEMURA

早稲田大学文学術院・同大学意思決定研究所・同大学理工総研

Faculty of Letters, Arts and Science, Waseda University Center for Decision Research, Waseda University Waseda Research Institute for Science and Engineering, Waseda University